
コールポイント

七畑七輪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コールポイント

【Nコード】

N8127Q

【作者名】

七畑七輪

【あらすじ】

”欠陥持ち”と呼ばれる子供たちが生まれるようになった、近未来の日本。二年前に父をなくした高校生の拓海は、父の墓前で、自分と同じ名前の一人の少年と出会うが……。投稿始めたばかりなので、物語が進むにつれ、あらすじも更新していきたいです。週に一回は投稿するよう頑張ります。

プロローグ（前書き）

近未来だから、ちょっとSFっぽいかも？科学の要素はほとんどないんですけどね。

プロローグ

最後に父を見たのは、4月上旬だった。

その日は、4月にしては、冷たい風が吹いていた……と思う。どっちにしろ、その日は休み明け試験に向けて勉強するため1日中家にいる予定だったし、外の天気など、重要な要素ではなかった。ただ、近くのコンビニに行くのに、普段の格好では少し寒いな、と思っただけだった。

朝起きてリビングに行くのと、そこでは父が窓の外を見ながらぼんやりしていた。何かを眺めるでもなく、ただ目をやっている、という感じだった。

父はいつも遅くに家に帰ってきた。本人は、仕事だと言っているが、遊んでいるのではないか、女がいるのではないかとよく離婚した母と口論していたのを覚えている。離婚してからというものの、家にいることはほとんどなくなり、帰って来た時も、着替えを取りに戻っただけ、という始末だった。自分は母方の伯父夫婦のもとに頻繁に通うようになった。伯父たちは、父のことを話題に出すものの、彼の悪口は決して言わなかった。それは、自分にとって救いだった。どんなにろくでなしにしろ、彼は父親であり、自分はその血を受け継いでいるのだ。彼らは自分のことを気にかけてくれ、伯父は酔った勢いで、やたらと真剣な表情で、一緒に住まないかとまでいつてくれた。それが本音だったと思う。素直に嬉しかった。でも自分の父親は、やはりあの人でしかなかった。

リビングに父が当たり前の様に座っていた時、何とは言えない苛立ちと怒りが湧き上がってきたものだった。きつと真夜中に帰ってきたのだろう。今思うと、そのような感情が湧き上がってきたのは、帰って来た時自分に声をかけてくれなかったせいだと思う。自分は、父が帰ってきてくれることを願っていたのだろう。だからきつと、父が帰って来たときは、いつでも迎えられるように、いつも夜には

必ず家に帰っていたのだと思う。リビングに入っていくと、父はゆっくりと顔を上げ、こちらのほうを見遣った。父と顔を合わせるのは久しぶりだ。彼が帰って来たときはいつでも自分は仏頂面だったし、顔を見ることも、ましてや目を合わせることもしなかった。だから、父の顔を真正面から見つめるのは、本当に久しぶりのことだった。

「何だ、辰也たつやさんの所じゃなかったのか」

第一声がそれだ。父は、自分のことなどまったく気にかけていないのだろうか。自分がこんなにも父の事を考えているというのに。

「伯父さんのところに泊まったことは、離婚以来ありませんよ」

その言葉で、どこまで自分の思いが伝わっただろうか。仏頂面で言ったので、まったく伝わらなかったのかもしれない。

「そうか」

そう言っただけ、父は黙り込んでしまった。血の繋がった者同士の会話で、これほど気まずい空気が流れるものだろうか。自分は、リビングに降りてきた本来の目的を果たすため、台所に向かい、簡単な朝食を作り始めた。

「俺の分はいらないぞ。もう食ったからな」

流しにある汚れた食器を見れば一目瞭然だ。おそらく自分で買ってきたインスタント料理を調理したのだろう。冷凍庫に入っていたものは一つもなくなっていなかった。

言ってくれば、作ってあげたのに……。勝手に冷蔵庫の中のものを使われても、腹が立っただろうが。家事はほとんど自分でこなしているの、どこに何があるかは把握している。たまに伯父の妻、宇沙美うさみやその長女が様子を見に来てくれるが、一人暮らしに近い生活を送っているの、それほどやることはない。

軽食を作り、父の視界に入らないよう台所で立って食べているとおもむろに父が話しかけてきた。

「なあ……母さんの所に行けば良かったって、後悔してるか？」

その口調は、何かを求めているわけでもなく、期待しているわけ

でもなく。だから、正直に答えた。答えてしまった。

「うん……。結構後悔してますけど……」

「そうか。そうだろうな」

あくまで父の口調は淡々としていた。一体何をしたかったのだろう。ただ会話をしたかっただけなのだろうか。それにしても結構重い内容の気がした。

「伯父さんたちはよく来るのか？」

「宇沙美さんとかがたまに。伯父さんは仕事で忙しいから来ませんね……。宇沙美さんにしろ、リビングで談笑して帰っていきますけど。することがなさすぎて、『年頃の子らしく部屋を散らかしなさい!』とか言いながら、強引に料理を作っていきますけど」

「そうか。気が強いあの人らしいな。ちゃんとおまえのことを気にかけてくれるんだな」

そういうおまえは、自分の子供のことを気にかけてないのか……！　と思わず叫びだしそうになるのをこらえ、黙々と朝食を口にはこんでいると、不意に、

「じゃあ、エロ本読み放題だな、おい？」

今まで聞かれた事の無い質問をされた。口の中身を吹き出しそうになるのをこらえ、

「なななな……何を言ってるんですかあんたは！」

仏頂面を決め込んでいたのに、思わずつつこんでしまった。父は、相変わらず泰然として、

「……こういう会話を普通の親子はするのか……」

「……………」

言われてみると、ここ数年、とくに離婚して以来、父とは会話らしい会話もしていなかった気がする。

気づいてみると、朝食も残り一口分になっている。それを口に放り込むと、父の使った食器とともに、食器を洗い始めた。一通り洗い終わったところで、さあどうしたものか、父親と一緒にの空間にいるべきか、それとも自室に戻って勉強するべきか悩みながらリビング

グに戻ると、父は、自分が始めに部屋に入っていった時と全く同じ格好で、やっぱりぼんやりしていた。誰に言うでもなく、でも自分には聞こえるようにして呟いた。

「俺は……やっぱり罰を受けなければならぬらしい」

その言葉がどんな意味をもっているのか、分からなかった。でも父は、無駄な行動や発言をする人ではなかった。彼がそのような発言をするには、きっと何かしら意味があるのだ。そう思っていると、突然、こちらを振り向いた。

「もし……何の罪もないモルモットを、強制的に実験室に連れて行き、人類のよりよい未来を作るために、モルモットが苦痛を伴うひどい実験をしたら、それは悪いことか？」

きっと、返事を求めているのだろう。父が何を言いたいのかはまだ分からないが、少し考え、

「もちろん悪いことです。でも、モルモットにはかわいそうだけど……、人間がこんなにも便利で住みやすい環境で生活できることも、そのような犠牲があつてからでしょう？ 人間のエゴですが、自分がこのような生活を送れるのも、そのような犠牲の上に成り立つものだと思うと、そのような実験を批判する事はできますが、完全に否定することなどできません」

これは、それほど間違っていない答えだと思う。父は、少し沈黙した。そして、ややためらいがちに、

「では、そのモルモットが俺たちと同じ、何の罪も無い人間だとしたら……？」

なかなか答えることは出来なかった。それに、父が躊躇ったことにも、多少なりとも動揺していた。父は、よほどの事が無い限り、自分の感情をほとんど表に出さないからだ。きっとこの言葉の奥には、何か深い意味があるのだろう。それを突き止めなければならぬと思ったが……父に問いたとしても、何も答えてもらえない気がした。考えても分からないものを、深く考える必要はない。だから、正直に答えることにした。……それが、父の望む答えであれ、そう

でないであれ。

「それは、絶対にしてはいけないことだと思います。同じ命なのに、モルモットと人を区別するのは、ひどいことだと思います。でもそんなことを平気に行える人間に……なりたくはありません。ましてや、何の罪もない人になんて……」

それを聞いた父は、いつも通りの泰然とした表情になり、

「これは、一言で答えられるような簡単な問いかけではない。ここで一番難しいのは、被害者と加害者が俺たちと同じ人間だということだ。人類の発展のために、そうすることはやむを得ないという人もいるだろう。自分の……いや、自分たち人間のために、たった一人の人間が、むごい仕打ちをされることを、それでもおまえは否定するか？」

たった1人の犠牲。それだけで、自分たちは、よりよい生活環境を手に入れることができる。……随分と大げさな内容だ。父も、明確な答えを期待していないに違いない。ただ、素直な意見を聞いたいのだろう。

「……それでも、そんな実験、自分は否定します。生贄に選ばれた人は、たまったもんじゃないだろうし……。それに、そんな犠牲の上に成り立つ幸せなど、自分にはありません。自分は、断固否定します。それが、人間として正しいことだと思います」

それを聞いて、父は、

「……それを聞いて、少し救われたよ」

とだけ呟いた。

父とのちょっとした問答の後、自室に戻り、彼との会話を吟味してみたが、やはり、彼が何を言おうとしているのかさっぱり分からなかった。もやもやした気持ちを抱えたまま、小一時間ほど翌日の試験に向けて勉強していると、リビングの戸が開き、玄関に向かう足音がした。

……また、黙っていなくなってしまうのか。

父が帰ってきてても、顔を合わすことがないまま、自分が気付かないうちに帰ってきて出て行ってしまう事が時々あった。そういう時は、台所の食器の位置が違っていたり、インスタント食品がなくなっていたから父が帰ってきたことに気付けたものの、実際は、自分の気付かないところでもっと頻繁に家に出入りしていたのかもしれない。それに、さっきの会話が気になってしょうがなかった。滅多に話さない父があのように話しかけてきたことは、異常だった。それに、この機を逃したら、一生彼の真意を理解することは出来ないと思った。だから、息抜きにリビングに行くという名目で、父を見送りに玄関に行くことにした。

父に近づいていくと、気配を察した父が顔を上げた。

「……俺は、もう行くぞ」

それくらい見れば分かる。

「あの……、さっきの言葉って、」

「俺は、人間としてひどいことをした」

言葉を遮り、目を合わせることもなく呟いた。頭に來たが、それよりも、父の強引な態度、ひどいことをした、という発言が気になった。

「俺は、とてもとてもひどいことをした」

同じような発言を繰り返す。

「それは、間違っていることだ。後悔もしている。だが今、あの時と同じような立場に立たされたとき、俺はやっぱり……同じことをすると思う」

寂しげな笑顔を浮かべ。

「だから、俺はこれから……せめてもの罪滅ぼしをしに行くんだ」

その表情は、とても心細そう。

「そうするしか、無力な俺には出来ないんだ……」

だが、頑として意志を曲げない力強さもあった。父の言っていることは、まるで遺言のようで、聞いていると不安になった。……今

から思えば、いてもいなくても同じだと思っていた父親の存在は、自分にとって、とても大きなものだったと思う。離婚してから、一緒に食事をする事とさえなくなっていた父と自分は、やはり何か強い力で繋がっていたに違いない。

父の独白を聞き、立ち竦んでいる自分を見て、父は、自嘲気味に笑った。

「お前も馬鹿だよな。こんなタイミングで、普段はしない見送りに来るなんて」

違う、気晴らしにリビングに行くところなんだ。そう言おうとしたが、今更悪あがきをするのは見苦しいとしか思えなかったし、父は、自分が理由を付けて彼を見送りに来たことを見抜いていたと思う。

「……いや、馬鹿なのは俺か。さっきあんな事を聞いておきながら、気にするなという方が無理だよな。……じゃあな」

そう言って出て行く方とする。その時、急に不安に駆られた。何か話さなければ、もう、父とは会えない気がしたが、どうやったら彼を引き止めることが出来るのか分からなかった。彼に、ずっとここにいて欲しかった。

その思いを受け取ったのか、思い出したように、彼はこちらを振り返って、長年使っていた腕時計を外し、差し出してきた。

「これ、やるよ。まだ、家族が揃っていた頃の思い出として、大事にしとけ。俺にはもったいない」

これでは、本当に遺言ではないか。

「いらないって……長年使ってきたのに……。これじゃ、まるで形見じゃないですか……」

その時の自分は、きつととても情けない顔をしていたのだろう。ちらりとこちらを見遣り、投げやりに父が言う。

「形見ってのは、まあ、アレだ。人は、いつ死ぬか分かんねえからな。俺も、お前も。……もし、お前の将来に、俺に関する苦悩があったら、それを恨めよ。……じゃあな。次がいつになるか分からね

えけど、期待しないで待っててくれよ。お前が幸せになってくれることを祈るぜ」

そう言って、父は出て行った。……自分に何の返事もさせないまま。

家から出て、彼を呼び止めることもなく、彼が完全に視界から消えるまで見送り、家の中に戻った後。手の中の重みに気付いた。

いつの間に受け取っていたのだろうか。さっきまで父の腕に巻かれていた時計を付けてみると、彼と違い、華奢な自分の腕にはぶかぶかで、ずっしりと重かった。

父に聞かれたとき、彼に、母の元に行かなくて良かった、父と一緒に良かった、と言えば良かったのだろうか。それとも、強引に父の分の食事を作り、一緒に食べながらとりとめもない話をすれば良かったのだろうか。はたまた、あの時玄関で、行かないで欲しいと訴えれば、あんな事にはならなかったのだろうか。

次がいつになるか分からねえけど、期待しないで待っててくれよ。……そう言ったにも関わらず、次は来なかった。

1日で終わる試験も無事に終わって、その2日後。つまり、玄関で父を見送ってから3日後。

父の遺体が発見された。

どこまでも青い空が広がっている。見つめていると、吸い込まれてしまいそうな程に、澄み渡った青い空。そんな青空の下で、

「お~~~~~~~~わったあああああ!」

と、少女の澄んだ声が響き渡った。

「やっと終わったよなあ!」

と、少年が嬉しそうに飛び跳ねながら同意するが、少女は胡散臭そうに茶々を入れた少年の方を振り返り、

「あんたの『終わった』は勉強なさすぎてテスト中ぐだぐだぐだ後悔してた事から開放されたって意味での終わった、でしょ? あたしの1週間前からの緊張とテストをやり遂げた達成感から来る終わったと一緒にしないでよ!」

と毒づいた。そして、思い直したかのように、

「お~~~~~~~~わ~~~~~~~~たああああ~~~~~!」

と、先程よりも更に大きな声で叫んだ。少年の方を勢いよく振り返り、

「どうだ!」

と、自慢げに言い放った。

「いや……どうと言われましても……無茶振りすぎねえ?」

少年が面倒臭そうに言ったのが気に食わなかったのか、少女はそっぽを向いた。そして、目の前のフェンスにもたれかかっている少年を見て、

「今度こそ倒す!」

と言い放った。少年は興味なさそうに、

「まあ、せいぜい頑張れよ。それよりもお前は声がでけえんだよ。まだテストが終わってないクラスもあるのに、ぜってえさっきの聞こえてたぞ。怒られても俺は知らねえからな」

と、不敵な笑みを浮かべた。

その少年は、一団の中で一番目を引く存在だった。平均身長よりも遥かに高い長身、鋭角的で端正な顔立ち、ラフに着こなした制服もそうだったが……一番目を引くのは、彼の顔にかけられた大きなサングラスだった。きつと今も、その奥で不敵に目を細めているのだろう。馬鹿にしたように、

「お前、今までそんなこと言ってきて、1度でも俺に勝てたためしがあったか、ああん？」

少女は悔しそうに、

「……っ、数学なら、結構勝ってますけど、何か？」

「つつても、俺と五分五分ってえ所じゃねえか。お前の一番の得意科目をもつてしても、俺様には勝てねえって事だ」

「うぐぐぐぐ……」

悔しそうに少女が齒軋りしているのを見て、始めに茶々を入れた少年が場をとりなすように、

「まあお二人さん、新学期早々ケンカしないで。一番悪いのは、休み明け初日に生徒にテストさせる学校なんだからさ」

「そういうあんたは、定期テストしか単位関係ないからって何も勉強してないでしょ！？」 あんたみたいな不真面目な生徒がいなかったら、学校だってテストなんかしないわよ！」

「お前、よくあの成績で高校あがってこれたな。教室でお前を見かけたとき、生き別れになった双子の片割れかと思ったぜ」

「うう……、心がひどく痛むのです……。うちにはムサイ兄しかおらんのです……。でも、俺は心が海のように広いから、許してやるのです……」

当の二人に貶された少年の名前は、海野海斗^{うんの かいと}。彼は、自分の名前に”海”という文字が二つ入っているのが気に入っているらしく、よくそれに関連した話題を口にした。スポーツ全般を得意とし、いつもへらへらとしてお調子者で、すぐ誰とでも仲良くなれるという羨ましい特技を持っている。

「あんた、中学までは古典と漢文で乗り切ってきたからいいものの、

理系科目死んでるんでしょ？ 今年は、ごまかしがきかないわよ」

そういうショートカットの前髪にピンをさしている長身の少女の名前は、新谷莉乃しんやりのという。同級生の平均身長と比べるとかなり高い長身に、細く均整がとれた体つきで、整った顔立ちをしていることから、容姿に欠点は無いと言ってもよい。当然男子からの人気も高いが、付き合っているという噂は流れたことがなく、茶道部と剣道部の両方に所属し、それらの腕前もかなりのものである事から、女子からの信頼も厚いという、性格にも非の打ち所がない少女だ。カリスマ性があり、洗練された動作、長身という事から、実年齢よりも一、二歳は年上に見え、同級生にとっては友人というより頼りになる姉的存在として扱われている。……もともと本人は、それをあまり快く思っていないようだが。

「この学校って、金でどうにかならないから困るんだよね。お金で解決すれば楽ちんなのに。私立ってフツウそういうもんでしょ？」
「私立がどうなってんのか良く分かんが、そんなことをされたら俺が困る」

すかさずサングラスの少年——伏見匠介ふしみしょうすけが言い返す。

「全ての事が金で解決できちゃうなら、俺たち貧乏人が学校に行けなくなっちゃう」

文倉学園あぐら。三十年ほど前に文倉圭けいにより創設された、一学年百五十〜二百人程度の中高一貫の学園で、歴史は浅いが、都内でも五本指に入る私立の有名進学校だ。文倉圭は、良家の息子として生を授かったが、仕事がうまくいかず、事業に大失敗し破産しかけていたので、三十代にして財産をかき集めベンチャービジネスに乗り出し、その結果それが大成し今に至る。今は、”文倉財団”を名乗り、製品だけでなく様々な文化活動も主催し、この学園もその一環である。彼の発想は新進気鋭でセンスの良いものが多く、そこが人気となっている。ちなみに彼はもう七十代だか、まだ会長の座を子供に譲り

渡す気はないらしく、今でも立派に財団の会長を務めている。学園に入るには日本最難関レベルの中学入試を突破しなければならず、入れたとしても、授業についていくのは困難を極めると言われている。学費も普通の私立より高いが、東京郊外に設置され、大通りから離れている校舎は近くの自然公園に接し、木々に囲まれているため開放感を味わえ、都心の様に高層ビルが立ち並んでいないため、景色もよいのが定評となっている。つまり、文倉学園に入ることというのは、財産のある家柄、優秀な学力の持ち主だということの象徴なのだ。だから、社会的地位が高く、金持ちの家は、自分の息子、娘をなんとしても文倉学園に入れようとあの手この手を尽くしている。

この学園の特徴は、ほかにもある。奨学制度だ。毎年全国各地で入試本番、東京の受験生と同じ時間に同じ問題を解かせ、成績上位者は特待生として学費を払わずして学校に通うことができ、東京での住居、食料費など生活に必要な費用は全て学園が負担するという、金銭的な問題のせいで一般大衆の中に埋もれてしまった優秀な人材を掘り起こそう、というシステムだ。当然、各地の受験生はこの権利を獲得しようと躍起になり、各地受験生は都内の受験生の人数を軽く超えるが、その条件はとても厳しく、特待生的人数も決まっていないため、三人の年があれば、一人もない年もあるのだ。仮に入れたとしても、成績が芳しくないと、学園をやめさせられてしまう。どっちにしろ、奨学制度の恩恵を受けている者は、卒業するまでの六年間、プレッシャーとの戦いというわけだ。もちろん、都内の入試で受かった者も、学力不足と判断された者は、金銭的な問題など関係なく学校をやめなければならないが、奨学金をもらっている生徒はその比ではなく、常に学年トップクラスにすることが求められている。そして、匠介は奨学金をもらって学園に通っている一人であり、彼が受験した年は、例年よりも多く、6人が奨学金をもらって学校に通っている。それら全てが定期テストで二十番以内の好成績を修めており、匠介など、当たり前のように毎回学年トップ

の成績を修めている。莉乃も、匠介には及ばないものの、常に学年一桁の成績をキープしているし、数学では匠介を抜き一位、総合では惜しくも匠介に及ばなかったが、二位にまでのぼりつめたこともある。海斗は確かに学年では下位の順位に属するが、学園にとどまっているだけでも、全国的に言ったら結構すごいことなのだ。莉乃も海斗も金持ちのため、高い学費を払っているが、それにも関わらず無償で授業を受けている匠介が自分よりも上の成績を取っている事が莉乃には気に食わないらしい。

奨学制度以外にももう一つ、最も有名な制度があるのだが……。

「ビンボー人はビンボー人らしく、あたしの召使にでもなってなさい！」

「俺も舐められたもんだぜ。おまえにそんなこと言われるとは。ビンボー人舐めんじゃねえ。俺よりも馬鹿なやつは、どっかで奉公でもしてろ」

「はあ！？　ばかってあたしのこと！？　あたしのメイド服姿を見たいのはいいとして、確かにあんたには及ばないかもしれないけど、全国的に言ったら……」

「はいはい、お二人ともやめなさいな。それにしても、二人とも仲がいいねえ。莉乃も匠介相手にしかあんな暴言吐かないだろうし、匠介はもともとあんま話さないし」

「うっせえ」

「な……なにが仲良しよ！　ふざけんじゃねえ！」

「……うん、もう罵倒されるのには馴れたよ……。それよりもお二人さん、どうしてここに来たのか忘れてません？　忘れてたっしょ」

ここ——校舎の屋上で、莉乃と匠介は、思い出したように自分達の荷物をたぐり寄せた。

三時間目で国語、英語、数学のテストが全て終わり、天気がいいと言って、彼らは早めの昼食をとるため屋上に上って来たのだった。普段の昼食時はちらほらとほかの学年の生徒や同級生も見かけるが、今日は彼らしかいないようだった。

「それにしても、高校生になった初日にテストやらせるなんておかしいと思うけど、たった三教科で良かったよ」

「あんたは死んでる理科がなくて良かったって思ってるだけでしょ……ねえ、そう思わない、拓海^{たくみ}？」

そう聞かれて、フェンスに寄りかかりながら拓海は顔をあげた。屋上に来てから今まで一度も会話に参加していなかったが、彼らの会話のやりとりは聞いていた。

「うん。海斗は理科がひどすぎる。最初は、リアクションが面白いから理科のテストが返ってくるのが楽しみだったけど、中三からはほんとに高校にあがれるのかって結構本気で心配してた」

「ほらみなさい！ あんたは友達にも迷惑かけてるってこと自覚しなきゃだめ！」

「タク……俺のことを本気で心配してくれる友人がいるって知って、俺はシアワセだよ……」

「それよりも、入学式何時からだっけ？」

拓海達新高等部一年生は、午後からちょっとした入学式がある。

中高一貫だから、それほどしつかりやるわけではないが、それでも高校生の門出を祝う行事に遅れるわけにはいかない。高等部一年生を除く中等部二年生から高等部三年生は、午後もテストがあるし、先日入学式を送ったばかりの中等部一年生は学園に来ていないので、高一生の入学式に参加する生徒はいないし、保護者の参加も無い。それでもちゃんと予定は確認しておきたい。

「ええっと、一時からだよ」

一週間の予定を事前に全て把握している莉乃が答えた。

「どうして初日に始業式をやらないんだろうね、ヘンだと思わない、綾子^{りょうこ}？」

莉乃が、その場にいる、最後まで会話に参加していなかった眼鏡の少女、柏原綾子^{かしわばら}に尋ねる。

「そうですね、あくまで私の考えですけど、テストを生徒にやらせることで、学校生活が始まるんだぞ！という自覚をもたせ、その翌

日に、ちゃんと心構えを持たせて始業式を行いたいのではないかと」
「あのじいさん、そんな事考えるのかねえ？」

「学園の実質のリーダーである文倉圭氏をじいさんなどと言っては
いけませんよ？」 海斗さん

フェンスに背を向け、正座をしながら良家のお嬢様らしく綾子が
言う。彼女も良家の生まれで、幼少から動作の作法、心構えを叩き
込まれた、いわば現代のヤマトナデシコなのだ。さっきからこの体
勢で弁当を食べているが、莉乃と同じ茶道部に所属していることか
ら、もとより正座には馴れている。

「とっとと弁当食っちゃおうぜ。こんなすげえ晴天で、屋上に俺た
ち五人しかいないってのは、もったいないな」

そう言いながら、自身の昼食であるコンビ二弁当を取り出してい
る時。

「ん……？ おまえ、涙でてるぞ」

「本当です、悲しいのですか？」

匠介の異変に気付いた海斗と綾子が声をあげた。

「あ？ ホントだ。かなしかねえけど、涙がでてる」

匠介も、今気付いたといった感じで頬に手を添え、涙を拭った。

「感情の自覚症状がなくなるのはいいことよ。あなたの完治も、そ
ろそろなんじゃない？」

「これを病気のように扱うのには抵抗があるが……、まあ、普通嬉
しいことなんだろうな」

匠介は、まるで他人事のように呟いた。

” 先天性認識不全・多寡症候群”^{せんでんせいにしき ふぜん たか しやうこうぐん}。この病名が生まれたのは、ま
だ十年ほど前のことである。十数年前、日本、朝鮮半島を中心に、
精神に欠陥や異常を持つ子供が異様なまでに多く生まれ始めた。そ
の症状は様々であり、普通では嬉しいと感じることを悲しいと感じ
たり、自分を人間以外の動物だと認識していたりと今までにないも

のもたくさんあった。だが、世界に存在するものがモノクロに見えたり、味が分からないなどといった、視覚障害や味覚障害など既存の障害を持つ者も多くいたため、当時の医者、学者はこの事態をどう收拾すれば良いか混乱した。そこで、彼らは欠陥・異常を持つ全ての子供たちが、ある共通した接点を持つことに気付いた。すなわち、それは先天的なものであり、生まれた後に症状を発症するということはない、というものだ。もちろん、生まれたばかりの赤子に精神に障害がないかと聞くわけにもいかず、この接点は様々な実験から発見された。そして、約十年前、この病名を付けたわけだが、あくまで便宜的なものであり、なぜこのような症状がアジアでの発症が多く、北・南アメリカ大陸やアフリカ大陸などでは少ないのかは謎のままだ。だから、この症状は後天的に生まれてくる場合もあるのかもしれないし、それを説明するため世界各国の機関が、自分たちが一番にこの謎を解明しようと日々研究をしている。成長してから生まれた障害は、以前通りの病名を付けられるし、従来存在する障害であっても生まれつきの障害なら、先天性認識不全・多寡症候群と名付けられる。だが、国によってその定義付けは様々なので、世界的に非常に難しい問題とされている。重度も様々であり、日常生活を送るのに何の支障もなかったり、適切な対処をすれば普通に生活を送れる者が大多数だが、中には普通の生活を送れないほど症状が重い者もいるので、世界のほとんどの国ではそれらを受け入れるための何かしらの施設を設け、入居者に改善の余地はないかと日々模索している。

この障害を持つ者は、日本では”欠陥持ち”と言われたり、defective men・womenをもじって”ディフェンズ”と呼ばれ、一時期差別用語となったが、その障害を持つ人数があまりに多くなったため、今では当たり前のように使われている。が、まだ彼らに対する差別はあらゆるところに残っている。

そして、2087年現在。今でも”欠陥持ち”は生まれ続けており、差別もあらゆる場面で残っている。

「やっぱ、サングラスじゃ完全には視界に入る色を遮断できないしね。でもよかったじゃん、涙を流す程度で」

拓海は、心の底から言った。やっぱり、匠介にはちゃんと色付きの世界を見て欲しい。

この前——正確には、春休みの前までは、匠介はスキーゴーグルのレンズの部分を黒く塗った形状のサングラスをかけていた。そうすることで、全視界の色を遮断することができたからだ。だが、少しでも色が視界に入ってしまうサングラスにかけ直したという事は、精神科医と学校の心理カウンセラーの許可を取ったという事であり、彼の症状が訓練により軽くなったということである。

「いつかみたいに、誰かさんを思いっきり殴らないで下さいね？」

綾子が、口許を手で隠し、おかしそうに笑う。

「……分かってるよ。俺の理性が止めてみせる」

匠介も”欠陥持ち”である。彼の症状は、特定の色を見続けるとその状況に関わらず感情が昂ぶったり沈んだりする、というものだ。大抵、感情が一定値を超える前にいらするなど自覚症状があるのだが、運悪く彼が中等部の時、事件を起こしてしまった。

それは定期試験直前の授業時だった。匠介はいらいらしていた。数秒目をつぶったが、その苛立ちは収まる事がなかった。気にはなかったものの、テスト前の授業、おまけに彼は特待生であったため、授業を一言一句も聞き漏らさず、テストには万全の状態で臨まねばならなかった。それが仇となった。

気付いた時、彼は教師や男子生徒に取り押さえられ、同級生が周りを取り囲んでいた。目の前には、先程まで隣に座っていた少女が頭を押さえながら、同級生の介抱を受けていた。それを見て、匠介は悟った。自分の感情が暴走したのだと。

原因は、少女がかけていた眼鏡のフレームの色だった。サングラスをかけていたにも関わらず暴走してしまったのは、目の端に無意

識のうちにフレームの色が四六時中映っていたからだ。フレームの色は、赤。彼はその色を見て、感情が昂ぶってしまったのだ。その翌日から彼はスキーゴーグル状のサングラスをかける事になったのだ。

「じゃあ、私も二年前みたいな新しい眼鏡を買おうかしら？」

「勘弁してくれよ」

誰かさん——綾子がつこり微笑んで見せたのに対し、匠介はげんなりしたように言った。

「あの眼鏡、結構お気に入りだったんですよ？」

「あの時は悪かったな、壊しちゃって」

あの時、眼鏡は破損してしまったものの、幸い綾子は頭に小さな瘤を作っただけで済んだ。もし、体格に恵まれた匠介の本気の一撃が綾子に命中していたら、事は取り返しのない事になっていたかもしれない。

この学園の、最大の特徴。それは、“欠陥持ち”を広く受け入れているということだ。

だが、それは結構危険なことだ。匠介のように暴走する生徒もいるし、それは生徒たちや教師、それに本人にとっても危険な事なのだ。だから、この学園は、そういう事態に迅速に対処できるように、教師には体術の心得があることが求められるし、園内には常に三人以上のカウンセラーが駐在している。

良家の生まれでも、当然“欠陥持ち”が生まれて来る事もある。

それは、子供や家の将来にも関わってくる事だ。だから、名家の両親が“欠陥持ち”の子供を生んでしまった時、彼らは何としても“欠陥持ち”の面倒を見てくれる文倉学園に入れようとする。文倉学園はそういう人々の資金から成り立っているのであり、三十年という短い期間でここまで有名になれたのもそういう人達のおかげなのだ。

そして、今、学園の三分の一の人数が”欠陥持ち”である。

綾子は今、濃い青色のフレームの眼鏡をしているが、眼鏡を壊してしまった事を匠介は結構気にしているらしく、唯一綾子にだけは苦手意識を持っている。

「匠介が泣いてるのは、きっと空が真っ青なせいだよ。それに無意識のうちに匠介は感動してるんだ」

拓海は言った。本当に、今の空はきれいだと思う。

匠介が馬鹿にしたように、

「”青”って言えば、相場は”悲しい色”って決まっているだろ？」

「でも、『きれい』って言う方が、なんかロマンがあるじゃん」

「はっ、この優等生が。普段はバリバリの現実主義者のくせに、こういう時、おまえが分からなくなるぜ」

現実主義者、か。拓海は思う。いつから自分は理想、幻想といったものに目を向けるようになったのだろう。……そうだ、あの時を境に、自分は何かが変わった。あの、父が死んだと知らされた時から。

父が死んだ——そう知らされた時、驚きはしたものの、やっぱり、と思う気持ちもあった。最後に父と会った時の発言は、まるで遺言のようだったし、形見のように手渡された腕時計を自身の腕に巻きつけた時に、もう父とは会えないのではないかと予感していた。だから、普通の人よりは、家族の死に心構えが出来ていたと思う。

それでも……拓海は涙を流した。あの時、確かに自分は悲しんでいた。なぜ、悲しいのかは分からなかったが、なぜ涙を流しているのかは分かった。悲しいからだ。それは当たり前前の事だ。父がいなくても生活していく事は出来ると思っていたし、金銭的な面でも、父がいなくてもいざとなったとき親戚が援助してくれると思っていた。だから困ることは何一つなかった。それでも、拓海は悲しかった。結局、自分は夢を見ていたのだ。離婚した母と母のもとにいる兄が自分達のもとに戻ってきて、また四人で暮らせるようになる事を。

父の死によって、その夢の実現が叶わなくなってしまったから、その事に悲しんでいるのだ。

……頑固なやつだ。拓海は、そう思う。どうしても自分は、父親の死そのものが悲しいとは認めたくないらしい。あんな、家庭を顧みないような父親が死んで、悲しいなんて。

父が死んでから、自分は何かが変わった。何が変わったかは分からないが、何かが変わったということは分かる。自分は、父の死をきっかけに、何かから解放されたのだと思う。

「……弁当、早く食べないと。君たちが騒いでる間、僕と柏原さんは、ほとんど食べ終わっちゃったよ」

「高一にもなって一人称が『僕』かよ。おまけにこの時代に眼鏡だとう？ ヨシ、今度俺と一緒にゴーコン行こうぜ、ゴーコン！」

「いや、合コンはちよつと……」

すかさず莉乃が、

「学校の女子で何とかしなさいよ！ あたしはごめんだけど、綾子なら土下座して逆立ちしてワン！ と言えば、付き合ってくれるかもよ？」

「『世界中の土地をあげる』と言われても、それだけはごめんです」
「敵が二人から三人になったっ！？」 タクは俺の事見捨てないよな
「！？」

「……なーんか、イジメてみたくなっちゃったなあ……」

「タクう！」

「はは、冗談だよ」

そう言って、拓海は眼鏡のフレームを押し上げる。今の時世、眼科に行けば簡単に視力回復手術を行うことができるが、そんな事をしてしまうと、これから自分の目を大切にできなくなってしまう気がした。……だから、匠介などに優等生とか言われてしまうのだが。綾子の両親もそうで、娘に手術を行わせていない。

五人とも、昼食を平らげ、入学式の時間も迫ってきたので教室に戻ろうと屋上の出入り口に向かっていている時。

「……ねえ、お父さんのお墓参り、した？」

一番後ろから付いてきた莉乃が、隣の拓海に、誰にも聴かれないように躊躇いがちに囁いた。

「……昨日、二周忌は済ませたけど、墓参りはまだ……。今日行くつもりだけど」

「……うん、行ったほうがいいよ。あたしが言える立場じゃないけど……」

莉乃は、父親をひどく嫌っている。彼女の家庭の事情はよく知らないが、家族の事を尋ねると、不機嫌になるかきまりが悪そうにする。だから、彼女が父親を大切にしろ、と言うような発言をすることは以外だった。

父の通夜では、拓海は決して泣かなかった。すでに泣いていたし、親戚の前では気丈に振舞っていた。もしかしたらそれを冷淡だと受け取られたかもしれないが、それでも他人に涙を見せたくはなかった。

葬式は、速やかに行われた。同級生も何人か来てくれたが、ほとんどは父方の親戚とその関係者だった。父の弟は父に代わって家業を継ぎ、仕事関係の知り合いも多かった。拓海は、葬式の手伝いと会葬礼状の作成に忙しかった——ほとんどは親戚が行ったが——し、その事で頭がいっぱいだった。

昨日は二周忌があり、墓参りに行くこともできたが、花も買っていなかったし、翌日にはテストもあるという事で、そのまま家に帰ってしまったのだ。

「……行こっか」

自分よりも僅かに上にある拓海の目を一瞬見ると、すでに誰もいない屋上を振り返り、莉乃は先に階段を降りて行った。

拓海もそれに関きながら、左手にはめた腕時計をさすった。それは、まだ父に貰った時のサイズで、二年前とあまり変わらない華奢な拓海の手首には、やっぱりぶかぶかだった。

二年前は、テストが終わった後だった。そして今年は、テストの前の日だ。……父が死んだ日は。

日付は同じだが、二年前と今は、違う。拓海は毎日家に帰ることがなくなり、ほとんど母方の伯父の家族と同居状態だ。

入学式も無事に済ませ、———と言っても、演説中に眠り込んでしまった海斗ほか数名のせいで文倉圭氏の演説が長引いてしまったというちょっとしたハプニングがあったが———拓海は花屋に寄り、文倉学園よりも更に郊外の墓地に行くため、墓前に添えるを買った。途中で今にも死にそうなよぼよぼの猫を見かけ何かあげようと思ったが、猫はすぐに姿を消してしまった。足に紐が絡まっているようだったが、大丈夫なのだろうか。墓地の近くで線香を買い、父の墓に向かった。墓を洗いながら、墓石に刻まれた父の家系の名前を目で追い、自分も死んだらここに入るのかな、と思った。

花を添え、線香を立て、特に何を考えるでもなく目をつぶり手を合わせれていると、こちらに歩み寄って来る足音を捉えた。

自分と同じく墓参りをしに来たのかな———そう思い、特に気にもかけなかったが。その足音は、拓海と少し距離を置いて立ち止まった。そして、そのまま微動だにせず、こちらを伺っているように感じられた。何だか不愉快になり、拓海は目を開け、顔を上げた。そこに立っていたのは、一人の少年だった。

小学校高学年といったところだろうか。短く切った短髪は、寝癖なのかそういう髪質なのだろうか、ピンピンとあちこちで撥ね、リュックサックを背負っている。

まだ学校が始まっていないのだろう。どこから来たのか分からないが、こちらの様子を探っているようなので、居心地が悪くなり、この雰囲気をなんとかしようと少年に話しかけた。

「えっと、僕に何か用？」

作り笑いを浮かべながら尋ねると、少年は拓海の間いかけを無視し、

「長篠大洋さんとは、どういう関係ですか？」
ながしのたいよう

と、逆に尋ねた。

そのぞんざいな態度と、自分の方が父の事を知っているぞ、と言うような態度にさすがにかちんときて、

「ぼくは長篠大洋の息子ですが何か？」

とつっけんどんに言い返してしまった。

少年は、驚いているようだった。「こいつが、あの大洋さんの……」と呟いたかと思うと、急に態度を変え、恭しく、

「申し遅れました。俺——いや僕は、父の代理で来ました。あなたのお父様には、父がお世話になりました……」

「いや、僕は君のお父さんどころか親父がどんな職場で働いていたかも知らないんだ」

自分の知らないところで、こんな子供と面識があったのか。拓海は、自分がどんなに父親の事を知らないのか思い知った。

「……ええ、あなたがお父様の事、特に職場の事をよく知らないのは、父から聞きかじっています」

父は、職場の人間に、自分の息子の事をどう話していたのだろう。きっと、愚痴などのあまり良くない事に違いない。

その時、少年が思い出したように、

「……大洋さんが亡くなったのは、昨日の事ですよね？ どうして昨日のうちに、お墓参りに行かなかったんですか？」

先程とは打って変わり、鋭い目付きで問いただす。

思わず、拓海は怯んでしまった。小学生が、こんなにも鋭い目付きをするものだろうか。

もごもごと答える。

「えっと……昨日は二周忌があつて、今日はテストもあつたし……」
「要するに、めんどくさかった、というわけですね？」

何で初対面の、しかも小学生にそんな事言われなきゃいけないんだ。でも、少年の鋭い目付きの前で、拓海は怯んでいた。恐怖さえ感じていた。だから、こう答える事しかできなかった。

「……ごめんなさい」

「謝れって言ってるんじゃないんです。もっと大洋さんの事大事にして欲しいんです、俺は」

どうやら、父はこの少年の親だけでなく、少年自身とも親しいようだ。

……父は、この少年とどのように接していたのだろう。

少年の態度からすると、少なくとも実の息子である自分よりは大切にしていたようだ。

拓海は立ち上がる。

「僕はこれで帰るんで、後は好きにやって下さい。お墓の掃除は、もうしたんで」

そう言って、背を向ける。それから、肝心な事を聞き忘れた事に気付いた。

「大切な事を忘れてました。あなたのお名前は？」

すると、少年は、そこで初めて躊躇うように視線を宙に彷徨わせた。再びこちらの方を見遣り、

「原巧」
はらたくみ

「へ？」

思わず間拔けな声を出してしまった。”タクミ”？

「ちなみに、漢字は？」

”原っぱ”の原に、”巧妙な技”の巧

”巧妙な技”じゃなくて”巧妙”だけでもいいと思うんだけどな———そう思ったが、口には出さない。でも、昨日の二周忌に”

原”という名前の人は出席していなかった気がする。彼の父親の事を聞いたかったが、代わりに、

「ぼくも拓海って言うんだ。漢字は君と違うけどね」と言った。

「あなたの名前なら、すでに知っています。もちろん漢字も———さようなら」

なぜ、自分の名前を知っているのか。父から聞いたのか。父とこ

の少年はどういう関係なのか。……聞きたい事はたくさんあったが、少年————原巧が一方的に話を終わらせてしまったので、仕方なく背を向け、帰る事にした。

しばらく歩き、振り返ると、巧が墓石に向かって嬉しそうに何かを話しかけているのが遠目でも分かった。

……その話が、親父に伝わるというね。

他人事のように思い、拓海は改めて前に向き直った。

どうせ、一週間後の今には、今日のこの出来事など、鮮明には思い出せなくなっているだろう。

そして、一年後の墓参りには思い出すだろうが、月日がたつにつれ、十年後には思い出せなくなっているだろう。

同じ名前の少年の存在が気にはなったものの、彼とはもう一生会わないと思っていた。——その時は、まだ。

拓海は複雑な思いを抱えたまま、帰路に着いた。この先、この少年と共に様々な困難を乗り越えて行くとは、まだ知らないまま。

「―――いっくぞー」

両手に自動式拳銃を持った真澄と、20メートル程離れ、対峙する。

「”防御”？ それとも”排除”？」

「”排除”だよー」

それもそうだな、と俺は思う。今、俺は真澄から見て、地面に描かれた半径二メートル程の円の前に立っている。

「用意してねー」

そう言われ、手に持ったモノを見つめる。

三年も前から頭のサイズがあまり変わっていないため、コレはまだまだ使えそうだ。

手の中に重みを感じながら、俺は、昨日からの出来事を思い出していた。

二年前の今日。長篠大洋は死んだ。

実際、巧が彼の死を知ったのは、大洋が発見された翌日のことだ。発見された時、遺体はまだ新しかったらしい。死んでからすぐに発見されたのだろう。

大洋には、とても良くしてもらった。巧は感謝してもしきれない。彼と叔父がいなかったら、“あの組織”の中で、巧は再起不能なまでに壊れてしまっていただろう。

四月の上旬。今はまだ、春休み中だ。もう少しで学校が始まるが、別に楽しみなわけではない。

特にする事もなく、巧はぼんやりと目の前を通り過ぎる今にも死にそうな猫に目をやった。足に紐が絡まっていたが、当の猫は特に気にした風でもなかったので、そのまま放っておくことにした。

——二年前の今日、大洋さんは死んだんだ。

巧が大洋と出会ったのは、彼が死ぬ約二年前、今から四年と少し前の事だ。

巧があゝの組織に半ば強制的に所属する事になった時、大洋はそこで働いていた。

彼は特に目を引く存在ではなかった。巧も、その時は新しい環境に馴染むのに精一杯で、周りの事など気にかけていることはできなかった。だから、大洋と初めて会話したのは、組織に入ってから約三ヶ月後、ようやく環境に馴れ始めてきた時の事だった。

——今思えば、あの時すでに俺は壊れかけていたな。

巧は自嘲気味に笑う。いや、もうすでに壊れていたのかもしれない。少なくとも、彼がいなかったら俺は手に負えなくなっていただろう。巧を危険視していた組織に殺されていたかもしれない。

巧は、“欠陥持ち”だ。

と言っても、ただの“欠陥持ち”ではない。組織に危険視され、スカウトされるほどの強力な力を持つ“欠陥持ち”だ。だが、それはかなり厄介で、巧自身も自分の力を上手く制御できないのだ。それは一般的な“欠陥持ち”にもあてはまるが、彼の場合、あまりにも力が強力すぎた。だから、組織に入ってもなかなか役立つ事はできなかったし、実際、組織は巧を目に付く所に置く事で監視しようとしていただけなのだろう。

——あそこに入ってから、たくさんの人を傷つけてきた。

恐怖、憎しみ、怒り。巧を取り巻く環境のほとんどがそのような感情だった。

だが、あの頃はもう、他人を傷つける事は当たり前の事になっていたし、大抵相手は犯罪者だったので、何の罪悪感も持ち合わせていなかった。精神的に麻痺していたのだ。

——大洋さんに会って、俺は随分救われたよな。

たとえその結果、上流階級の生活を送れなくなったとしても、何の後悔もない。今だに組織に目を付けられているものの、叔父との

この生活には何の不満もないし、それなりに満足している。

目の前を三毛猫が通り過ぎる。都会には猫がいなかった。この地に來たとき、猫が当たり前のように闊歩していて、驚いたものだった。

巧は、辺りを見回した。空が曇ってきている。天気予報によると今日は雨が降らないらしいし、おそらくその予報が外れる事はないだろうが、あまりにいつも天気予報通りだというのは、何だか気に食わない。この時代、天気予報が外れる事は、まず無いと言っているのだが。本当にこの曇天で、明日は予報通りに快晴となるのだろうか。

空から前に視線を移すと、どこかの家庭の洗濯物が、だらしなくはためいていた。それも、首都圏では見られなかったものだ。

“イーストエンド”。その場所が、今、巧が生活する世界の全てだった。

とうきょうとがいはがばんがいち

“東京郊外東番外地”。別名、“イーストエンド”。イーストエンドという固有名詞は、他にもいくつかあるが、日本人がこの意味での“イーストエンド”と言う時は、必ずと言っていいほど差別的なニュアンスが含まれる。なぜなら、この地に住むのは、東京での生活に於いて失敗した者がほとんどだからだ。意気込んで上京したものの、うまくいかなくて金銭が底を尽きてしまった者。事業に失敗し、破産したビジネスマン。社会的格差が激しい現代日本では、東京はまさに弱肉強食の世界だった。

この地に住む人々は、全国的にも生活水準は低い位置に属し、ひどい所は一日の食にさえ困っている。巧の家はイーストエンドの中では高い水準に属するが、首都圏に比べ、圧倒的に不便で環境も悪い。

——でも、俺は後悔していない。

組織をやめ、ここに追い出されたせいで、圧倒的に環境は悪くな

ったものの、人間の心を取り戻す事ができた。完全に組織から自由になる事はできないだろうが、あの時の荒んでいた自分の心を思うと、こちらに来て良かったと思う。

唯一気にかかるのは、叔父を巻き込んでしまったという事だ。自分が組織をやめるというワガママを言わなければ、叔父にこんな不便な思いをさせずに済んだだろう。組織に所属する代わりに親族と自分の快適な生活を約束されたが、仮に自分が組織を辞めたとしても、トップクラスの成績で大学を卒業した叔父の収入なら、首都圏の生活とまではいなくても、それなりに快適な生活を送れただろう。

全て、自分のせいだ。

幼い頃に両親を失くした巧にとって、叔父は頼りになる兄的存在だった。自分がここに来なければならぬ事になっても、叔父は笑って許してくれ、自分もついていく、と言った。快適な生活を捨てて。

ごめんなさい……何度も何度も謝った。それでも叔父は笑っていたし、次第に謝っている事が申し訳なくなってきた。だから……巧は、もう悩まない事にした。だが、彼がここに来てから数ヶ月の間は、地獄の日々だった。

巧がここに来たのは、今から三年前、大洋が死ぬ一年前の事だ。

“あの組織”に入っただのが、小学校一年生の夏頃。その頃とは別の学校だが、学校でどのように振るまえばよいか、よく覚えていなかった。

巧は小学校に通い始めた。だがそこは、強い子供達がイレギュラーな存在——すなわち“欠陥持ち”を支配するコミュニティだった。そして巧は彼らにとって、絶好の獲物だった。

巧が学校に通い始めた時、“欠陥持ち”は、学年の人数の五分の一程しかいなかった。巧が“欠陥持ち”で、途中から学校に入ってきたという事もあり、登校初日から虐められ始めた。それまで虐められてきた子供たちにとって巧は彼らの救い主だったに違いない。

巧が無愛想という事もあり、彼は虐められ続けた。教師達は見てもぬふりをした。差別の対象である“欠陥持ち”がどうかなったところで、どうでもよかったに違いない。もしかしたら、彼ら自身こそ“欠陥持ち”である生徒を差別の対象にしていたのかもしれない。

巧への虐めは、始めは些細なものだった。クラス他の“欠陥持ち”の子と同様、給食の量を減らされたり、靴の中にダンゴムシをたくさん入れられたり、といった感じだった。だが、他の子と違い、巧への虐めだけは、どんどんエスカレートし、実害を伴うものになってきた。巧が彼らの些細な虐めに他の子と違い、これっぽっちも動揺しなかったからだ。当たり前だ。組織での一年半は、彼は加害者であったものの、それだけの事で傷付いたりするような精神ではやっていけなかったからだ。

だが、ある朝、学校に来てみると、彼の上靴がなくなっていた。親しい友人がいなかった——“欠陥持ち”の子供達は、彼らで集まる事で自分たちを守っているが、巧はそういう事をしなかった——巧にとって、それは単なるいたずらではなく、虐めの一環だという事は、すぐに理解できた。だが、物理的な被害にあうのは初めてだ。ダンゴムシなら、靴をひっくりかえせば済む話だし、虐めというものを巧は大して気にしていなかったが、こういう事をされるのは困る。……そう思って、巧は、心当たりのある虐めっ子達のグループに、苦情を言いに行ったのだが。

「はあ？ そんなの知らねえよ」

「被害妄想ヤバくね？」

“欠陥持ち”の靴になんか誰が触るか。少なくとも、俺達マトモな人間は触らねえよ」

どのグループからもシラを切られてしまった。

仕方ない。叔父さんに言って、新しいの買ってもらうか。

そう思って、その日は学校で借りたスリッパで過ごし、帰りに靴箱に行った時。

墨汁で汚され、無残にカッターで切り裂かれた上靴がそこにあっ

た。

怒りも悲しみも湧いてこなかった。代わりに思った事は、たとえば新しい靴を買ってもまた壊されそうだ、さてどうしよう、といった事だった。

クスクスクス……。その時、廊下の方から忍び笑いが聞こえてきた。見ると、朝巧が靴の行方を尋ね、シラを切られたグループの一つだった。

リーダー格の大柄な少年が巧に近づき、

「ムカつくんだよ、ゴミ」

と言われ、おもいつきり鳩尾を拳骨で殴られた。

声も出さず崩れ落ちる巧を見て、

「自分が少しモテるからって調子にのってんじゃねえ」

巧は、それを黙って聞いていた。

……大したことないな。

殴られた時、まず始めに思った事が、その事だった。

組織に入ってから最初の三ヶ月は、死の恐怖と隣合わせだった。死そのものではない。いつ任務に出され、傷つくか分からない恐怖。安全な場所にいても、ずっと恐怖を感じていた。だが、時が経つにつれ、その恐怖もどんどん薄れていった。順応ではない。単なる精神的な麻痺なのだ。本来「死ぬかもしれない」と思う事について、人間——いや、生き物は皆、恐怖を感じなければならぬのだ。だが巧は、ナイフを持った相手を見ても、銃を携えた敵と退治しても、いつの間にか恐怖を感じなくなってしまった。怪我をしても、『痛み』と言う感覚に慣れてしまった。

だから、たかが小学生の拳骨が、『痛い』と認識できても恐怖の対象となることはなかった。いちいち避けると後で面倒な事になりそうだったから、わざと殴られただけなのだ。その気になれば、相手が何人でも、小学生なら勝てる自信があった。

「“欠陥持ち”は、誰でも差別の対象じゃなきゃいけねえんだ。幸せになっちゃいけねえんだ」

この大柄な少年は、“欠陥持ち”に対して何か個人的な恨みでもあるのだろうか。

“先天性認識不全・多寡症候群”という存在が社会に認められるようになってから、国が認めた“欠陥持ち”が犯す犯罪を取り扱うのが非常に難しくなった。“欠陥持ち”は、国家が定めた定義に従って認定されるものであるが、その定義付けは非常に曖昧で困難なものであり、ましてや彼らの犯す犯罪に関しては、精神疾患だから個人に責任能力は無いものとして見るべきなのか否かという事に重点が置かれるからだ。だから時には、人を傷つけたとしても、何の罰則も食らわないケースがあり、そこが問題となっている。

……もつともこの少年の場合、口調に優越感が含まれていたことから、単に巧が女子に好かれている事が気に食わなかったただけだろうが。

巧は、本人は望まない事だが、それなりに可愛らしい顔立ちをしている。虐められてもいつも平然としていることから、女子の間では“欠陥持ち”でもそうでなくてもそれなりに人気がある。……もつとも、“欠陥持ち”でない人が“欠陥持ち”に好意を寄せている事がバレてしまったら、それだけで虐めの対象になるので、普段は巧への好意など表には出さないが。

「何とか言えよ？」

「もしかして泣いてんじゃねーの？」

少年の取り巻きが冷やかすが、巧は平然と顔を上げた。早く家に帰って靴を買ってくれるよう叔父に頼みたかった。

「な……、何だよ」

巧の人形のような無表情を見て、リーダー格の少年が、少し狼狽したように——だが、それを表には出すまいと気張って——声を荒げる。

巧は、それを一瞥すると、帰路についた。

……それから、巧への虐めがエスカレートしたのは。

人は、憎いという理由だけでなく、「自分の方が強いんだ」と思

いたいがために、人を虐める場合もある、と巧は思っている。おそらく巧への虐めがエスカレートしたのも、単に巧への恐怖心を認めたくないがためだったのだろう。迷惑な事だ。

翌日、巧は新しく買いかえた上靴を持ち、いつも通り学校に向かった。

巧から「上靴が壊された」と事情を聞いても、叔父はいつも通りに振舞っていた。叔父はそういう人だ。巧が面倒事——たとえば、叔父が学校に苦情を言いに行く事など——を増やしたくないと言う事を、ちゃんと分かっている。それか、単に面倒臭かっただけかもしれない。

これからは毎日上靴を持ち帰んなきゃな——。そう思いながら、巧が教室に入っていく、先ず目にしたのは、バラバラになった、机の中に入っていた自分の教科書だった。

それらは、カッターのようなもので切り裂かれ、原型を留めていなかった。

それを見て真っ先に巧が思った事は、怒りでも悲しみでもなく、「今日の授業どうしよう」という事でもなく、組織にいた頃の事だった。

都会では、子供達は紙の教科書など使わず、皆電子書籍を使っていた。値段も教科書とそれほど変わらない上に、そちらの方がはるかに軽く、持ち運びが楽だったからだ。……イーストエンドは、教科書そのものが貧相だしなあ。電子書籍を壊された方が高くつくから、紙の教科書で良かったんだけど。

巧がそう思って、こちらを見てにやにやしている昨日のグループを見つめると、何人かが決まりが悪そうに目を逸らした。彼らはきつと、リーダー格の少年が怖いのだろう。だから、彼に逆らわずこんな事をやったのだ。彼のグループでなくても、決まりが悪そうにしている生徒は教室に何人かいた。

「タクミ君、今日学校に来た意味なかったんじゃないの？」
昨日の少年が、気色の悪い声を出す。

「大変だねえ、せっかく買ってもらった教科書なのにい。誰がバラバラにしちゃったんだろう、ひどいなあ」

自分が壊したくせに、何言ってるんだか。分かりきった事を言うより、罵倒したほうが有意義だと思うのだが。

そんな事を思っていると、担任が教室に入ってきた。

教師は机の上の無残になった教科書を見ても、何も言わなかった。苦情を言わない限り、何もしないのがこの学校のルールだった。イーストエンドに住む人々は、自分の事で精一杯の者が少なくない。他人の子供の事など好き好んで気にかける教師などいないと言ってもよかった。

「オマエ、ムカつくんだよ」

少年が巧に言い放つ。教師は何事も無いようにホームルームをやりはじめる。

学校の事など、巧にとってはどうでもいい事だった。自分が学校に行っているのは、叔父にこれ以上迷惑をかけたくない、という事からだった。

——黙っていたら埒が明かないな。

早く会話を終わらせたかったので、巧は少年に言い返した。

「そんなに俺がキライなら、これからは空気のように扱ってくれ」

その一言で、巧を取り巻く環境はどんどん悪いものへと変わった。

ある日は、給食の中に泥を入れられ。またある日は体操着に落書きされ。

その度に巧は少年に文句を言いに行ったのだが、「空気とは会話できねえよ」、「空気は体操着なんか着ねえだろ」……『空気』と言う一言で切り捨てられてしまった。

まあ、どうでもいい。最初に考えもせず言った俺にも非はある。巧は割り切り、リーダーの少年は巧への不満をますます募らせた。そんなある日。

その日は、“査定”の数日前だった。

“査定”……それは、“欠陥持ち”であるか否かどうかを調べるために、日本政府が年に一回行っている、小学生以下の子供達の検査の事だ。“欠陥持ち”は、国家によりどのような障害を持つか、データ化され厳密に保管されている。政府は“欠陥持ち”の事を正確に把握したいらしい。だから、このような検査を毎年行うのだ。それは政府が選んだ医者、人材で行われ、その検査を小学生がごまかすというのは不可能と言ってもよい。だから、子供達は、査定前には自分達が“欠陥持ち”と認定されないか怖れている。無自覚であつても、実は他の子と違う世界を見ていたため、“欠陥持ち”と認定される事があるからだ。そしてそれは、巧が通う小学校の子供達も例外ではなかった。リーダーの少年も、いつになく機嫌が悪かつた。

「飲めよ」

体育の時間。それまで巧に嫌がらせをしていた少年が、何人かグループの少年を引き連れ言い放った。

その日は、前日の雨の影響で地面が所々ぬかるんでいた。都会はほとんどと言っているほど地面は舗装されていたので、土むき出しの学校の運動場は巧にとって新鮮で、気に入っていたのだが。ある一角に少年達は巧を連れて行き、

「空気なんだから、飲んでも平気だろ」

地面に溜まった泥に、力任せに巧を押し付けようとした。

その時だ。巧の中で何かのスイッチが入ったのは。

……どうしてその時はいつもと違い、怒りを覚えたのかは分からない。だが、それまでの少年達の行動には、組織にいた頃の自分を連想させるものがあつたからかもしれない、と今になってはそう思う。あの頃——何の躊躇もなく人を傷つけていた時、確かに自分は、自分に倒された相手を見て、嘲っていた。優越感さえ感じていた。——そんな忌まわしい過去の自分を思い出してしまったからかもしれない。

気がつくと、目の前の地面が大きく抉れていた。

組織にいた頃は、無理矢理にでも感情を暴走させなければならなかった。訓練のおかげで自分が何をやっているか自覚し、ある程度は行動もコントロールできるようになったのだが、……長らく訓練をしていなかったせい、自分が何をやったのか、全く自覚する事ができなくなってしまったらしい。

地面が抉れ、サッカーゴールが倒れ。……遠くには、巧が投げ飛ばしたのだろう、鉄製でできた持ち運び用の鉄棒が地面に突き刺さっていた。クラスメイトや、巧が少年達に取り囲まれているにもかかわらず見てみぬふりをしていた教師も、啞然としてこちらを見ている。

そして、さっきまで巧を地面の泥に押し付けようとしていたリーダーの少年が、地面に倒れ、右腕を押さえて呻いていた。右腕は、普通ではありえない方向に折れ曲がっていた。

巧はその少年に近づいていった。リーダーの少年を取り巻いていた少年達は、巧が近づいて来るのを見た瞬間、ある者は腰を抜かし、ある者は奇声をあげて逃げ出した。

「来るな！ 来るなあ……！」

泣きながら必死に後ずさろうとする少年を無視し、

「見える範囲以外の被害は？ 怪我人はお前だけか？」

極めて事務的に言い放った。……組織にいた頃と同じように。

少年は何も言わず、がくがく震えながら頷いた。

それからは、大変だった。

リーダーの少年をイーストエンドの外の病院へ連れて行き、学校が警察を呼び、警察もどう処理をしないものか悩んでいた。――しかし、一目で普通の警官とは違うと分かる高級そうなスーツを着た男が現れ、彼が教師陣や警察に一、二言何かを言っただけで、その場は収まってしまった。

男は、おそらく”あの組織”の者だろう。巧は見た事がなかったが、そうに決まっている。彼らは何らかの方法で巧を監視し、問題を起こさないかどうか見ているのだ。そうでなかったら、巧は訴え

られていたかもしれないし、少なくとも学校に通い続ける事はできなかっただろう。常に監視されているわけではないだろうが、巧が問題を起こしたら、何らかの方法で組織に情報が行くようになっていくのだろう。

その時から、クラスメイト達は、巧を腫物のように扱った。

巧が虐められる事はなくなり、むしろ、巧の機嫌を損ねないように恭しく振舞う者もいた。

ある日、給食の時間、巧のせいで骨折した少年——この時はもう完治していた——が、巧に近づき、

「俺のデザートやるよ」

と、引きつった笑顔を浮かべ言った。

そのデザートは、少年の大好物だった。それが出てくると、いつもそれを“欠陥持ち”から奪っていたから、きつとそうだ。

——きつと、俺の報復が怖いんだろうな。

巧の“障害”を目の当たりにして、いつか復讐されると思ったのだろう。実際、あの雨上がりの日、彼は死の恐怖を感じたに違いない。

——鬱陶しい。いつまでもこんな状態が続いたら、逆にいらす。

そう思って、巧は少年に言い放った。

「ウザイ。俺に話しかけるな。俺に関わるな」

その日から、少年は学校に来なくなった。

巧は、体を預けていた塀から離れると、すぐ近くにある自宅に向かった。

巧の家は、この辺りにしては珍しく一軒家で、叔父と二人で暮らしている。叔父は今、仕事が休みだから、家にいるはずだ。

玄関の扉を開け、中に入ると、

「おっかえり」

と、間延びした男性の声がした。

「……ただいま」

巧は、そちらの方を振り返る。そこでは、叔父がいつものようにだらしのない笑みを浮かべて立っていた。

原真澄^{ますみ}。彼は巧の母の弟で、幼い頃に交通事故で死んだ巧の両親に代わって巧を育ててきた、現在の巧の保護者だ。まだ三十になっただけだが、顔立ちや態度が実年齢よりも若い———というか幼い事から、まだ二十代前半に見え、巧にとっては親と言うか、年の離れた兄のような存在だった。

「朝っぱらから、どこいったの？ 『夕方に帰る』って書き置きだけじゃ、不安だよー」

眼鏡のフレームを押し上げ、真澄が言う。

彼は視力が悪いわけではないが、視力回復手術が普及し始めた頃から眼鏡をかける人口は著しく減り、その反動だろうか、近年では視力が悪くなくても眼鏡をかける“メガネ・ファッション”が流行っている。……耳の上にあんな物が乗せてあって、鬱陶しくないのだろうか。巧には全く理解できないが。

「朝起きたらいなくなつて、ビックリしたよ。メモ見付けるまで『家出!?!』かと思ってパニックってたけど、こんな時間までドコいったの?」

「……そこら辺をふらふらしてた」

「朝の五時から今まで!?! もうおやつの時間じゃん!」

巧から見てもそうだが、彼の口調はかなり子供っぽい。

“先天性認識不全・多寡症候群”という病名が生まれたのが、約十年前。日本を中心に、生まれつき障害を持つ子供が大流行したのは、十数年前。だが、十歳以下の障害を持つ子供の割合が顕著に増え始めたのは、三十年も昔の事なのだ。だから、十年前に新たな病名が生まれたとき、日本政府は便宜的に、小学生以下で幼少の頃から症状が確認されている子供を“先天性認識不全・多寡症候群”と登録する事に決定した。だから、この病名を持つ者は、最年長でも

二十代前半という事になる。

真澄は登録されなかったものの、巧は、真澄の性格から彼は“先天性認識不全・多寡症候群”だと思っている。

———そんな性格でも、俺にとっては大切な家族だ。

誰が何と言おうと、真澄は巧の叔父であり、親であり、頼れる兄であり、大切な恩人なのだ。

そんな家族に心配をかけてしまって、申し訳ないと思う。……だからこそ、朝から家を出てまでずっと考え続けていた、本当の気持ち传达了。

「俺は、大洋さんの命日に墓参り行けない事に、これっぽっちも納得いかない」

「だーから、俺らはなるべく姿を見られちゃいけないんだって」

「言い訳ならいくらでもできるだろ。去年に続いて今年も一日我慢しなきゃなんないなんて」

「少しでもおまえと大洋の接点を他人に掴ませるわけにはいかないんだ。組織にキツク言われてるだろう？」

いつになく真剣に言う真澄に、巧は言い返す事ができなかった。

彼の言っている事は正論だ。“あの組織”の存在は、徹底して隠し通さねばならない。仮に巧がおかしな動きをしたら、彼が消されるだけでなく、真澄も巻き込まれてしまうだろう。それだけ組織は徹底していた。

———何で、体面上だけの付き合いの奴らが堂々と墓参りして、俺らはこそそしなきゃなんないんだ。

そう思うと、なんだか大洋が汚されていく気がした。だが、自分たちは我慢しなければならぬ。真澄を困らせたくはない。

「……納得いかねえけど、我慢する。明日はいいよな？」

そう言うのと、真澄は顔をくしゃつと歪め、

「いい子だねえ。もし誰かに会ったら、『父の代理です』って言うんだよ？」

「分かってるよ、そんなくらい」

そう言いながら、何の花を買っていいとか、と巧は考えていたのだった。

翌日。

早めの昼食を終わらせて、巧は真澄をおいて家を出た。真澄は仕事の関係で行けないからだ。

イーストエンドを出て、少しだけバスに揺られ、花を買い、墓地に歩いて向かった。

——墓地が郊外にあってよかったな。

そう思いつつ、大洋が眠る場所に行くと、意外なことに先客がいた。

学校の帰りだろうか。制服を着て、中学二年生から高校一年生に見える、線の細い少年だ。

——俺と同じ、誰かの父親の代理だろうか。自分で来ないで息子に行かせるなんて、失礼なやつだ。

そう思って、じっと見つめていると、手を合わせ黙祷していた少年が顔を上げた。さすがに、ぶしつけにじろじろ見すぎだったろうか。少年は、不快感が滲み出た作り笑いで、自分に何か用かと訊ねてきた。

「長篠大洋さんとは、どういう関係ですか？」

息子に墓参りの代理を務めさせる、非常識な人間の名前を聞いてやろう——そう思って質問したのだが。

「僕は長篠大洋の息子ですが、何か？」

なぜか、むっとしたように言い返された。だが、そんな些細な事はどうでもよかった。

こいつが、あの大洋さんの息子？

予想だにしていなかった。大洋とはあまりにも似ていなかったからだ。

大洋は大柄な男だったが、この少年はかなり線が細く、儂い印象

さえ与えられる。だから、大洋の息子だという考えはこれっぽっちも持っていなかった。

恩人の息子に、俺はなんてひどい態度を取ってしまったんだろう。そう思い、慌てて姿勢を正すと、

「申し遅れました。俺——いや僕は、父の代理で来ました。あなたのお父様には、父がお世話になりました……」

父親の代理とは、都合のいい話だ。この少年も、先ほどの自分のように、俺の事を軽蔑しているかもしれない。

「いや、僕は君のお父さんどころか親父がどんな職場で働いていたかも知らないんだ」

大洋から聞いていた。この少年——長篠拓海、自分と同じ名前を持つ少年は、大洋の事をあまり知らないのだと。

「……ええ、あなたがお父様の事、特に職場の事をよく知らないのは、父から聞きかじっています」

そうだろう。巧は、自分の方が大洋の事を知っているのだと思い、少し得意になった。

そして気付いた。……おかしい。俺は本来、ここで誰にも会う事はないはずなのだ。大洋さんの命日は、昨日のはずだ。

実の息子のくせに、命日に墓参りに行かなかったのか。思わずきつく問いただしてしまう。

「……大洋さんが亡くなったのは、昨日の事ですよ？　どうして昨日のうちに、お墓参りにいかなかったんですか？」

すると、拓海は怯えたような表情になった。自分が組織にいた頃、よく自分に向けられた表情だ。

———今、俺は鋭い目付きをしているんだな。それでもどうでもいい事だ。

拓海が何か言い訳じみたものをしているが、そんな事は関係ない。ついきつく言ってしまう。

「要するに、めんどくさかった、というわけですね？」

「……ごめんなさい」

そして、気付いた。拓海の手首の腕時計に。

最後に巧が大洋に会ったとき、彼の腕にはまだ長年愛用していた腕時計が付いていた。

——俺が最後に会った後に、大洋さんはこいつに会いに行っただのか？

拓海の腕には合わないらしく、腕時計は、不自然に腕にくっついていた。

時計の事を問いただしたかったが、何だか悔しいので、

「謝れって言ってるんじゃないんです。もっと大洋さんの事大事にして欲しいんです、俺は」

代わりに、つっけんどんに言ってしまう。

こんな巧に愛想を尽かしたのだろう。拓海は立ち上がり、
「僕はこれで帰るんで、後は好きにやって下さい。お墓の掃除は、もうしたんで」

そう言って、背を向ける。それから、思い出したように、

「大切な事を忘れてました。あなたのお名前は？」

躊躇ってしまった。自分の名前を言っているのだろうか。……だが、この少年とはもう会う事はないだろう。少し驚くかもしれないが、すぐに忘れてしまいうに決まっている。

「原巧」

「へ？」

思った通り、拓海は驚いたような間抜けな声を出した。

「ちなみに、漢字は？」

昔はまだ、巧は自分の漢字が書けなかった。学校ではまだ“原”という漢字しか習っていなかったからだ。ましてや、イーストエンド。“巧”という漢字が書けるのは、クラスでもほとんどいないだろう。だから、真澄に教わった事がある。

——おまえの名前は、“巧妙な技”の“巧”なんだよ。

——“巧妙な技”って？

——俺のように、賢い人間にしかできないような事だ。

今なら“巧妙”の意味も分かるが、確かに真澄はあんな性格だ
けで賢いよなあ。……そう思い出しながら答える。

「“原っぱ”の原に、“巧妙な技”の巧」

そう言った。拓海は何か尋ねたそうだったが、結局、

「ぼくも拓海って言うんだ。漢字は君と違うけどね」

と言った。

これ以上、俺に関する情報を与えるのは良くないだろう。

巧は、自分の名前を言ってしまった事をすでに後悔し始めていた。
だから、会話を無理矢理終わらせようとした。

「あなたの名前なら、すでに知っています。もちろん漢字も――
――さようなら」

大洋の息子が自分と同じ名前だと知ったとき、理不尽に嫉妬した
ものだった。そして、漢字が違うと分かったとき、なぜかほっとし
たのを覚えている。

拓海は尚も腑に落ちない、という顔つきをしていたが、やがて諦
めたように、背を向けた。

拓海が歩いていくのを確認した後、墓石に向き直った。

「あれから、いろいろな事があったんですよ、大洋さん……」

――この声は、果たして大洋さんに届いているだろうか。二
年前に死んでから、俺はまだ声変わりしていないから、分かってく
れるだろう。

大洋と最後に会ったのは、二年と少し前の事だ。その時は、まさ
か彼が死ぬなどとは思ってもみなかった。そして、大洋は最後に息
子に会いに行った。拓海の腕にかけられていた腕時計は、大洋の
遺体が発見された時に見つかった遺品ではなく、彼が直接渡したも
のだと思う。そうとしか思えなかった。

――やっぱり、息子は特別な存在なのかな。

巧は両親がいないので、そこらへんの事はよく分からなかったが、
最後に会ったのが自分ではなかった事が、少しだけ悔しかった。

「一年前も、命日に来れませんでした……、二年経っても、俺の

あなたに対する敬意は変わりません。生きている限り、俺は――俺たちは、あなたが志半ばで終わってしまった事を、達成してみせます」

その後、少しの間、とりとめのない話をした。近所にすむ野良猫が増えた、相変わらずクラスメイトは巧によそよそしい、など。それから、水を汲んできて、先ほど洗い終わったばかりだと拓海が言っていた墓石を再び洗い始めた。洗い終わっても、洗う前とはあまり変化がなかった。

家に着いたときには、辺りは暗くなっていた。そんなに長居したつもりはないのに。

「ただいま」

夕食の支度をしていた真澄が振り返り、

「随分遅くなったね」

と、のほほんと言った。

巧は、墓地での出来事を思い出した。やはり、真澄には報告しておいた方がいいだろう。

「大洋さんの息子に会ったよ。なんだかいけ好かないやつだった」
真澄はかなり驚いているようだった。

「え、息子って、下の方の!？」

「長男は母親の所にいるようだし、そうなんじゃないの」

「俺達に関する情報は何も言わなかったよね!？」

「……いや、俺の名前は言っちゃったけど……、それだけ」

「だめやん!」

巧も後悔していた。自分の名前など言うべきではなかった。

だが真澄は、さっきまでの慌てぶりが嘘かのように、

「ま、言っちゃったもんは仕方ないさ。どんな子だった?」

怒られなかった事に、巧は少し安堵しながら、

「大洋さんとは違って、なよなよした女っぽい奴だったよ。野生に

放りだされたら、真っ先に死にそうなタイプ」

「大洋も『俺とはぜんぜん違う！』って言ってたしなあ。母親似かねえ」

それから、真澄は思い出したようにパン、と手を打った。

「そーだ、俺ら、パーティーに誘われたよ！」

「パーティー？」

何かの比喻表現だろうか。真澄が突拍子もなく話題を変えることはよくあった。

「正確に言くと、護衛ってところかな。俺達の大切なパトロンさんから」

「俺が行く必要性がどこに？」

「知ってるだろ。先日、穏健派が襲われた事件は」

それは初耳だ。新聞に載っていたかもしれない。でも巧は読んでいない。

「……もう少し詳しく聞かせてくれ」

ニヤリと笑い、……だが、真剣な目付きで真澄は説明を始めた。

「それはだね——」

真澄から説明を聞いた後。

巧は真澄と共に、定期的な訓練をするため、夜の工場地跡に来ていた。数日後のパーティーに備えるためだ。

時刻は、あと一時間ほどで日付も変わろうかというところ。

この辺りは人が住んでいないため、巧達がここで何かやらかしても誰かに不審に思われる事はないだろう。

巧は、金属バットを二つ携え、真澄は大きなショルダーバッグを肩に掛けていた。

巧は、ショルダーバッグの中身のあるモノに思いをめぐらせる。

ソレは、組織に所属していた頃から持っているモノだ。

はつきり言って、あの頃の事はあまり思い出したくないが、アレ

を頭に掛けるとき、不快感は感じない——。

「どうした？」

真澄が怪訝そうにこちらを見ているのが分かった。ついとうっかり、物思いに耽っていたらしい。

俺は何でもない、と言うと、手に持ったモノを頭に装着した。

俺は、クラスメイトを傷つけた日から、真澄の提案で定期的に訓練を行うようになっていた。組織にいた時は毎日のように行っていた訓練をしなくなった結果、あのように少年に怪我を負わせてしまったかもしれないからだ。

組織の事を思い出す時、ほとんどが忌まわしい思い出だ。だが、それだけではない。俺と同じ境遇の、様々な“欠陥”を持った者達に出会った。

鳥になりたいと願っていた、少しコワイ先輩。どこまでも賢く、どこまでも傲慢だが、どこまでも自信に満ち溢れていた天才。自分の声で世界を変えてみたいと、歌い続けていた少女。彼らだけではない、他にも俺と同じ“欠陥持ち”達がいた。

彼らは今、どうしているのだろう。まだ、組織にいるのだろうか。彼らは俺と違った。明確な自分の意志を持って、あるいは自分の成し遂げたい事のために、組織に所属していた。始めは強制的に所属させられただけだろうが、その中で自分達の目標を見つけていった。

何もできなかったのは、俺だけだ。

“あの組織”の中で、何も見出せなかったのは、俺だけだ。

彼らだけではない。真澄、そして、大洋さん。俺はただ、彼らに助けられてきただけだった。

だけど——、「彼女」の歌に出会えた。組織にいて良かった事なんてなかったけど、「彼女」の歌に出会えただけで、まだ少しは救われたかもしれない。

頭に装着したもの——大型のステレオヘッドホンの重みを感じながら、そう思う。

現代では、ピアス型の超小型音楽再生装置があるが、それではダメだ。余分な音は、徹底的に排除しなければならない。

組織を抜ける際、“鎮静歌”以外の歌は没収されたものの、また“彼女”が歌をこっそり作ってくれた。

腰に巻いた太いベルトに差した、ヘッドホンと細いワイヤーで繋がった小型の再生装置を操作し、両手に金属バットを持つ。

「——“排除”に設定」

俺の眩きを聞き取ったのか、真澄が銃口をこちらに向ける。中身はゴム弾なので比較的安全だが、これが誰かの命を守るための訓練だと思うと、少し緊張する。

リョウイキヲオカスモノヲハイジヨセヨ。リョウイキヲオカスモノヲハイジヨセヨ。

そう念じながら、音楽を流す。俺の中で何かのスイッチが入り、そして——何も分からなくなった。

真澄が円の中の地面に向けて、ゴム弾を撃っていく。

俺はただ、円の中に入ろうとするゴム弾を、両手に持った金属バットで叩き落していく。

排除。排除。排除排除排除……。

だが、それは長くは続かなかった。

ゴム弾が腹部に当たり、激痛が走る。

「うっっ……ぐっっ……!!」

その場に膝をついてしまう。

「大丈夫!？」

すぐさま真澄が駆け寄ってくる。

「骨にヒビとか入ってない!？」

「それは大丈夫だ」

手を押さえ確認したが、それはないようだった。

真澄がほっとしたように、

「被弾数、三。それに、前回よりは持続時間が長くなったね。組織にいた頃と比べるとまだまだだけ」

「……ああ」

「もうすぐ学校始まるし、今日は寝よつか。学校の前にはパーティーがあるけど。……カワイイ女のコいるかなあ」

だらしなく鼻の下を伸ばす真澄に向かって、

「どうせエリートのオッサンばっかだろうよ……俺はもう立てるか、早く帰ろう」

そう言い、工場地跡に背を向ける。

できれば、こんな訓練などしたくはない。

でも、大洋さんが残してくれたヒントを手掛かりに、俺は進まねばならない。大洋さんが追い求めたものを、彼に代わって突き止めねばならない。

それに……パーティーでは、何かが起こりそうな予感がする。根拠は無い。勘だ。だが、組織を辞めて三年間、誰かが巧の“欠陥”を求める事は、これまでに無かった事だ。

何かが起こる。そう確信できる。

だから俺は、パーティーに参加する。

それは俺のためでもある。

大洋さんの言葉——俺の両親の死は、意図的なものだったかもしれない、という謎を突き止めるために。

墓地から家には帰らず、拓海は伯父……辰也の家に行った。父が死んでから、家に帰る頻度はかなり減った。

だが、家を売り払う気は無い。金銭的な面で親戚には申し訳ないが、家がなくなってしまあとまだ家族四人で暮らしていた頃の思い出までもが消えてしまう気がした。

辰也達が暮らす家は、拓海の家近くにあり、文倉学園ともそれほど離れていない。夕食は彼らと摂る事が多く、たまに泊まっていたりもする。拓海が家に戻る時は、大抵教科書を取りに行ったり制服を代えに行ったりする時が多く、実質、辰也の家にいる時間と拓海の家にいる時間はあまり変わらない。

玄関のモニターの前に立ち、モニターが拓海だと認識し扉が開いたので、拓海は靴を脱いでそのままリビングに向かった。そこでは大柄だが穏やかな顔つきをした少年がパズルをやっていた。

しばぐち としぐち
芝口冬悟。拓海のいとこであり、“欠陥持ち”である少年だ。

彼の症状は、“対人恐怖症”と変わらない。幼少の頃から症状が見られるため、便宜的に“欠陥持ち”と言われているだけだ。拓海より一つ下の中三になるが、他人が怖いため、学校にもあまり行けず、家で過ごしている事が多い。両親は、何とかして来年は有名進学校を受験させようと思っているが、その目処は立たない。本人は家族に申し訳ないと思っているらしく、勉強は頑張っているが、欠陥を克服せねばどうしようもないらしい。

冬悟が気兼ねなく話す事のできる数少ない人物の一人——拓海は、彼に話しかける。

「学校もうすぐ始まるね。始業式は出る？」

「……やっぱ、人はコワイよ……」

顔を上げず、冬悟が言う。それでも彼は、頑張って中二最後の一週間は、学校に通っていた。その頑張りを、拓海はすごいと思って

いるし、だから冬悟に学校に行けと無理強いする事はしないようにしようと思った。

「……そっか。ガンバ」

黙々と作業を続ける冬悟を残し、洗面所に向かい、手を洗いに行く。

——やっぱり、分らないや。

“欠陥持ち”でない拓海には、“欠陥”というものがどれほど人の自由を奪い、どれほど不幸にしているのか、さっぱり分からなかった。

“欠陥持ち”ではない。

たったそれだけの事で、色々な事が変わってくる。

今日、屋上で一緒に昼食をとった五人のうち、“欠陥持ち”は匠介しかないが、彼を見ていても分かる。

——だから、彼らを見てみると、なんの差別もされず、自由に暮らせる自分が幸せだと思う。それこそがまさに偏見だと思うが。———そういえば、どうして自分はある四人とつるむようになったのかな。海斗は自分とは正反対のタイプだし、共通点と言えば、名前に『海』という漢字が入っているくらいしか思い当たらない。莉乃はもともと綾子と仲がいいのはいいとして、彼女は匠介を嫌っていたはず。匠介は一匹狼な感じがするし、自分は無害キャラを貫いている。でもなんだか集まるようになったんだよね。いつ、どうしてだっけ。

そう思いながらリビングに戻ると、冬悟の他に、もう一人増えていた。……それを確認する前に、思いっきり抱きつかれる。

「おっかえりい」

明るい声で言ったのは、この家の長女である芝口あきらだ。最近仕事を始め、一人暮らしを始めたのだが……。いい人なのだが、拓海はあきらが苦手だ。なぜかと言うと……

「どおして昨日はうちに来なかったの！？ 着せたいお洋服がたくさんあったのにい」

……拓海を溺愛しているからだ。実の弟以上に。

「きつ、昨日は試験勉強するために家に……！　くっ苦しい！　息が詰まる！」

それでようやく拓海を解放したあきらが、拓海の顔を覗き込む。

拓海は何だか気ままずくなり、目を逸らす。取り繕うように、

「……あきらさんって、今日仕事だったよね？」

「うん、でも早く終わったから帰ってきちゃった」

あきららは去年、大学を卒業し一人暮らしをしているが、時々こうして帰ってくる。弟や両親の様子を見に来たり、夕食を一緒に食べるのもそうだが……、主な理由は、拓海に会うためだ。

拓海は幼い頃からあきらに好かれている。

正確に言えば、都合のいい着せ替え人形扱いされている。

拓海は、昔から少年にしてはかなり女顔だし、線も細い。それは今も——拓海にとっては残念な事だが——変わらず、時々無理矢理あきらにかわいい服を着させられる時がある。まあ、言い換えれば女装だ。

今回もやはり、

「この前かわいい服買ったの！　働き始めたばっかだし、一着しか買えなかったけど、タツ君にはぜひきてほしいな。いつかお揃いで着ようよ！」

「やめてよ」

間髪を容れず、拓海は言い返す。こういう時は、きっぱりと断っておかないと、後で何をされるか分からない。

しかし、あきららはニヤリを笑うと、

「もちろん、タダで、とは言わないよ？　何てったって、タツ君の女の子姿だもん」

そう言って、鞆から何かを取り出す。

思わず拓海は絶句してしまった。

「そ、それは……！」

「ふふん、九条一浜くじょうひとばまの新刊だよん！」

あきらが取り出したのは、拓海が欲しいと願っていた、四月発売の文庫本だった。

「それを、どこで……？」

「結構頑張って探したんだよ？ ……って言って好感度上げたいトコだけど、帰りに大きい本屋寄ったら山積みされてたよ」

先を越された……。拓海は唇を噛む。

電子書籍が普及するようになってから、本屋はめっきり減ってしまった。持ち運びが便利かついくつもの作品を入れる事ができる電子書籍の方を好む人が多かったからだ。

だが中には、電子書籍よりも、紙の本を好む人もいる。拓海もその一人だ。新しい本の匂い、紙の手触り——そういったものが、拓海は好きだった。だから、学校の教科書も大多数の生徒とは違い、紙のものを使っているし、わざわざ帰るのは不便だが、教科書を取りに家に帰る手間は無駄だとは思わない。

拓海お気に入りの超人気作家の九条一浜の本も紙の本で読みたかったので、テスト前にも関わらず近くにあるいくつかの本屋に探しに行ったのだが……。悲しいかな、郊外の本屋はどこも品薄で、目当ての本は見つからず、泣く泣く諦めたのだった。

「郊外の本屋にはなかったって言ってたよね？」

さあ、どうするどうする？ といったニヤニヤ顔で、あきらが訊ねてくる。

———今、自分の前には究極の選択肢が二つある。

一つは、紙の本を読むのを諦め、仕方なく電子書籍で読むか。

もう一つは、自我もプライドも捨て、女ものの服を着る代わりに、紙の本を譲ってもらうか。

ぜひ紙の本で読みたいよなあ、そっちの方が『趣』ってものがあるし、でも自分を捨ててまで紙の本にこだわるってのはなあ、でもやっぱり早く読みたいし……。

そうやって一人あきらの前で悶々と悩んでいると、

「ただいま……。……あら、あきらはまた拓海君を虐めてるの？」

辰也の妻であり、あきらと冬悟の母……宇沙美が買い物から帰って来た。家に拓海がいて当然だという顔つきで、あきらを諭す。

「あきら、いくら可愛いからといって、なでなでしたり一緒に風呂に入りたいと思っても、拓海君は一応男の子なんだから、女の子扱いしちゃかわいそうよ?」

『一応』男の子って……。それ以外にも、結構ひどい事言われた気がする。そもそも“拓海があきらに虐められる”女装騒ぎ”って前提が成り立ってる時点で相当おかしいと思う。

そんな複雑な拓海の心境には気付かず、

「だって……。九条一浜の本買ってきた報酬にタツ君の女装姿見たいって……」

「……そうですか。妥当な報酬を払うわけなんだね。拓海君、後はどうするか自分で選びなよ。九条一浜の文庫本は、結構貴重だと思いますよ? ……拓海君の女装姿見たいし……」

何か最後に変な事を言われた気がするが、空耳だろうか。……でも、あきらさんには申し訳ないけど、男を捨てる事はできない……っ!

その事を言おうとしたら、突然、拓海の携帯電話が鳴った。

宇沙美達に頭を下げ、リビングを出て、“テレビ電話”というボタンを押す。

電話はニューヨークにいる兄からのようだ。拓海が家に着いたのは五時頃だから、ニューヨークでは昨日の午後三時過ぎ、といったところだろう。兄は今大学生で、いろいろ研究をしているというし、今は休み時間だろうか。

ボタンを押し、兄の立体画像が浮かび上がる。

兄の真一しんいちは、どちらかと言うと父親似の精悍な顔つきの青年だ。

拓海は兄の容姿が羨ましかった。自分の細い体つきを結構気にしていた。

「……拓海? 聞こえてるか?」

「聞こえてる。テレビ電話にしないから、よろしく」

薄暗い廊下では、拓海の安価な携帯電話はうまく顔を読み取ってくれないだろう。

兄は何だか眠そうだった。徹夜で研究室に籠っていたのだろうか。「元気か？」

「僕はまあまあかな。今日から学校。兄貴は何だか眠そうだね」

「まあ、寝ないで研究してるからな。俺は好きでやってるからいいんだけど。……それより、親父の墓参りには行ったか？」

「うん、さっき。何か、父親代理っていう変な子にあったけど、特に異常なし」

「そうか」

そう言った後、少し躊躇うように、

「……俺とお袋は、夏頃行く事になりそうだ。おれはともかく、お袋は研究研究で俺よりも多忙だからな。……悪いな。俺から話す事はそれだけだ。お前は何かあるか？」

「特に無いよ」

「そうか。いつでも連絡受け付けるぜ」

そう言って、通信は終わった。

兄の立体画像が消えた薄暗い廊下に、拓海は佇む。

——親父が死んでから、お袋は何かから解放されたのかな。自分と同じように。

リビングに戻ると、あきらが冬悟と一緒にパズルをやっていた。

宇沙美は夕食の支度をするためだろうか、いなくなっていた。

「夕飯食べてくっしょ？」

あきらが振り向かず言う。

「うん……、お願いします」

芝口家は、いつでも拓海が夕食を一緒に摂れるように、少し多めに作っている。拓海が食べないときでも、大食いのあきらや冬悟が平らげてくれるからだ。

「泊まってく？」

「明日は始業式だし、教科書取りに戻る必要ないけど、制服が家に

あるから今日は食べたら帰るよ」

拓海は少し躊躇い、

「本の事だけど……」

「ああ、あれならタダであげるよ」

あっさりとかきらが言う。へ？

「ぶちゃけ、うろたえてるタツ君見たかったただだし。それともやつぱ女装する？」

「めめめ滅相もございません」

拓海はぶんぶんと頭を振る。

その時、宇沙美が一通の封筒を持って入ってきた。

「そうそう拓海君、忘れないうちに言っておくけど、今日掃除しに拓海君ちに行ったんだけど、こんなもの入ってたよ」

と言って渡されたのは、一通の封筒。宛名を見ると、叔父の名前。

「何だろ？」

不思議に思い、封を破り、中身を読む。

「何だったー？」

のんびりとあきらが訊ねる。

中にあったのは、叔父主催のパーティーの招待状だった。

「出といった方がいいんじゃない？ 将来働く事になるかもしれないし」

拓海の手元を覗き込みながら宇沙美が言う。

叔父は拓海の父に代わり、家業を継いでいるが、拓海にぜひうちで働かないか、と言っている。拓海はまだ将来の事について明確な目標はないので、将来のために一応、長篠家の子孫として出席しておいた方がいいだろう。

「えーと……。パーティーは今週の土曜日だね」

「いーなあ、おいしいものが食べれて」

あきらが面倒臭そうに言う。彼女は、拓海が長篠家と交わる事をあまり快く思っていない。気付くと、パズルはほとんど完成してい

た。

「特に準備するものもないらしいし、まあ、楽しんできなよ」
「そうします」

台所に戻る宇沙美を見ながら、拓海は叔父達にどのように挨拶しようか、と考えるのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8127q/>

コールポイント

2011年3月3日01時10分発行